

山と堤防 視界遮る

検証 石巻・大川小の惨事

釜谷地区の被害突出 独特の地形が影響

石巻市の指定避難所だった大川小は北上川河口から約4キロ、海拔1〜2層の釜谷地区にあった。津波への意識が比較的高い河口域と比べ、堤防と山に挟まれた独特の地形が避難を遅らせ、多数の犠牲者が出た一因となった可能性もある。

(1面に関連記事、15面に証言詳報)



大川小の校舎。2階まで壁が抜け、屋根には津波に運ばれたがれきや建材が打ち寄せた

3月29日、石巻市釜谷

釜谷地区は1960年の高さ4層の堤防があった。チリ地震津波で被害がなされた釜谷地区で避難し、市の津波ハザードマップでは、宮城県沖地震に伴う津波が到達する可能性は低いとされていた。

市によると、東日本大震災に伴う釜谷地区の死者、行方不明者は計193人。地区人口(2月現在で497人)の4割近くに上る。

北上川河口域の長面地区の死者・不明者は人口の2割で、尾崎地区は1割に満たない。地区外にいて被災したケースも含むため単純に比較はできないが、釜谷地区の被害は突出している。

宮城県内の学校について震災当日の避難行動を調査している東北福祉大の教員長面地区の男性(56)は「津波警報が出たら山に逃げる習慣があるわれわれと比べ、釜谷では津波を意識しにくかったと思う」と言う。

釜谷地区と海の間には山が張り出し、北上川と、並行する富士川にはそれぞれ問題提起する。

例もあり、学校建築の在り方が見直す必要がある」と

津波襲来の歴史なし 避難遅れの一因か